FDガイド第13号

アクティブ・ラーニングの実施例

鹿児島大学 FD 委員会 FD ガイド WG

【発行／2017年2月】

アクティブ・ラーニングの概要についてはFDガイド第9号で紹介されています。本ガイドでは、本学において実施されている授業の中から、「初年次セミナー」、「大教室での授業」および「学外と連携したプロジェクト」での実施例を紹介いたします。講義の目標や形態によって、どのような方法が適しているか異なると思いますが、授業改善のヒントになれば幸いです。

① 初年次セミナー（教育センター　伊藤 奈賀子 准教授）

初年次セミナーⅠ（1年次前期）

1.授業の準備：テキストとマニュアルがあるので、全体と各回の目標を毎回確認した後、該当の章だけでなく、その後の部分にも目を通して、全体の流れの中で今回確実に抑えておかなければならない内容、学生に習得しておいてもらわなければならない事項を確認します。

その上で、授業の流れを頭の中でシミュレーションします。「初年次セミナーⅠ」はグループ活動を中心としているので、常に進捗状況やディスカッションの様子に目を配ります。準備の段階では、進捗状況があまり良くないグループにどのような声掛けをするか、特定の学生の負荷が重くなっているグループの状況改善をどう促すかなどを考えます。学生の動きや反応をイメージしながら1時間半の時間の使い方をイメージしていきます。

配布資料やパワーポイント等の教材を作ることはほとんどありません。学生は購入したテキストを持参しているので、できるだけそちらを活かすことを心がけています。授業の初回でメモを取る活動がありますので、それを踏まえ、口頭で説明を行う際にはテキストの欄外やノートにメモをとらせるようにしています。

2.授業の進め方で工夫している点、特徴的な点：「初年次セミナーⅠ」は、テキストに基づいてアカデミック・スキルを習得しつつ、グループでのディスカッションを通じてプレゼンテーション能力を身に付けることが目的の科目です。そのため、個々に読んだり書いたりする活動はなるべく自宅でしてくるよう指示し、授業時間はグループでの話し合いに使うようにしています。複数学部の学生でクラスが編成されていることもあり、授業時間外に集まって相談するのはなかなか難しいようなので、授業時間の有効な使い方を考えて行動するよう繰り返し伝えています。

グループで話し合っているときには、学生が緊張感を持ちすぎることなく相談できるよう配慮してコミュニケーションをとっています。全く話し合いができていなかったり、雑談のようになってしまっていたりする際にはこちらから声をかけ、活動を修正させます。一方、それなりに活動できているグループに対しては、状況を説明させたり、問題点を述べさせたりすることを通じて考えをより深めることを促すようにしています。

3.学生はどのような能力を身につけているのか（通常の授業との違い）：全クラス共通の目標からすればアカデミック・スキルの習得やプレゼンテーション能力ということになります。取り上げているテーマに関する内容を単に知識として覚えることは重視しておらず、分かりやすい流れでのプレゼンテーションや、様々な考え方を持つ複数人でのプロジェクト遂行などが一定程度できる能力を育成する授業です。

初年次セミナーⅡ（1年次後期）

1.授業の準備：ワークブックとマニュアルがあるので、基本的な準備はⅠと同様です。ただし、Ⅱの場合は毎回必ず宿題を提出させているので、次回授業でそれらに対してコメントできるよう、必ず目を通しています。同様の問題が数多く見られた場合や数は少なくてもどの学生にも理解しておいてもらいたい問題が見付かった場合には、クラス全体にフィードバックをします。例えば、1つの資料を調べるだけで答えが分かるような問いを追究しようとしている学生がいた場合などです。資料を作ることはやはりほとんどなく、板書をしてメモを取るよう指示しています。

2.授業の進め方で工夫している点、特徴的な点：「初年次セミナーⅡ」では、学生が論証型レポート作成に必要な能力を身に付けることを目指しています。最終的にグループでのプレゼンテーションを行ったⅠと違い、レポート作成はあくまで個々に行います。そうした中で、他者と話し合いながら文章をより良くしていくことの意味を強調しています。教員が説明するだけではなかなかピンと来ないでしょうから、使う予定の資料についてグループ内で説明させてその適切さを一緒に考えさせたり、取り上げようとしている問いが重要であることを説明させて他の学生の反応を確認させたりしています。

学習事項についての説明を行う際には、レポート作成以外の表現や社会生活全般との共通点を指摘するよう心がけています。例えば、科学的な根拠に基づいて主張を行うことは、プレゼンテーションやディスカッションでも共通して重要ですし、卒業後の職業生活でも必要だと思います。ここでの学習事項はこの授業だけの話ではなく、汎用的な能力であることを理解してもらいたいと思っています。

3.学生はどのような能力を身につけているのか（通常の授業との違い）：全クラス共通の目標としては、一定の水準以上の論証型レポートが書けるようになることです。具体的には、自分で追究すべき問いを明確にすること、明らかにすべき仮説を立てること、問いの重要性を説明できるようになること、根拠に基づいて主張できるようになること、あらかじめアウトラインを作った上で書くこと、何度も推敲しながら書くことなどです。

アクティブ・ラーニングの実施例

② 大教室で学生に発言させるためのティップス ――アクティブ・ラーニングへのはじめの一歩（教育センター　渡邊 弘 准教授）

1.大教室で学生に発言させるための最強のティップス
⇒発言内容のレベルに応じて、ボーナスポイントカードを配る（写真1参照）。
※このような「外からのインセンティブ」には、強い副作用もあります。

2.指名された学生が、発問に対して答えられるようにするためのティップス
⇒教員の発問に対する学生なりの答えを書かせてから、指名し発言を求める。
※手元の紙（ワークシートを用意したり、レジュメに記入欄を設けたりする）に書かせてから指名すれば、学生は、手元の紙に書いてあることを読めばよいことになります。
※書かせている間に机間巡視をして、授業の進行に役立ちそうなことを書いている学生を見つけておいて指名することもできます。

3.予習をさせた上で発表させるためのティップス
⇒予習課題プリントを2種類（個人用・グループ用）用意し、それに従って予習をさせる（写真2参照）。

［手順例］
①個人予習課題プリントを用意し、それに従って学生が予習する。
②グループ予習課題プリントを学生の班に1枚ずつ用意し、それに従って授業時間外に学生が班で話し合いをする（その結果をグループ予習課題プリントにまとめる）。
③授業開始までに、教卓へグループ予習課題プリントのコピーを提出させる（原本は学生の手元に持たせたままにする）。
④提出されたコピーをざっと見て、発表できそうな班を指名し、教壇に出てきてもらって発表させる。
※このティップスを使うと、壇上で発表しない学生も同じように予習してきているので、「発表した班に対して、他の皆さんは質問や意見はありませんか」と投げかければ、なんらかの発言は出ることが多くなります。

写真1. 学生はボーナスポイントカードを貯めておき、期末試験の答案用紙の裏側に貼る。ボーナスポイントは、成績評価の際に加点する。

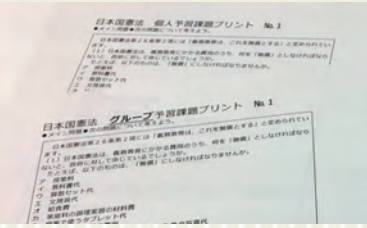

写真 2. 個人予習課題プリントとグループ予習課題プリントの内容は同じでよい。学生の氏名を書く欄の数だけが異なる。

③ 学外と連携したPBL（法文学部　大前 慶和 教授）

当ゼミではエコスイーツというプロジェクトに取り組んでいます。スイーツ店をはじめ、70～100社近い企業・団体と連携しているのが特徴です。

1.授業準備：全てではないものの、連携先と前年度末は次年度に向けた打合せを実施します（教員だけでなく、学生も主体的に関与します）。本来業務を抱えながら教育研究に協力して頂いていることを忘れてしまうと、信頼の崩壊は一瞬です。また、プロジェクトは意思決定の積み重ねですから、学生の負担がかなり大きくなります。そこで、毎週の授業（＝定例会；全員参加の意思決定の場）に先立ち、学生代表およびリーダーとは綿密な打合せを実施します。教員も学生も、準備に多くの時間を割くこととなります。

2.PBLを進める上での工夫と課題：PBLは協働が基本です。個人のレベルでの努力は通常の授業と同様ですが、さらに組織的努力の蓄積を行います。学生には個性があるので、全員に同じ役割を与えることはできません。適材適所とまではいえないまでも、学生の得意分野を早く見つけるようにし、組織的行動に馴染めるように導きます。また、学生への行動指針になると考え、ルーブリックも用意しています。しかし、学生のこれまでの学習プロセスには協働能力を高める取り組みが決定的に不足しており、順応できない者が大変多く存在します。意欲的に活動する集団とそうでない集団とに分裂しがちで、対立も生じます。この解決策が見つからず、悩むことも少なくありません。

3.身につく能力：発言力、主体性、協働能力（相手を思いやる姿勢も含む）、決断力、責任感、行動力などは、圧倒的だと感じます。資料作成、プレゼン、コミュニケーション能力も鍛えられます。他者との関係を強く意識するからだと考えています。さらに知識欲も強くなる傾向があります。ただし、全く順応できない学生も少なからず存在しているため、結果が両極端になることは否定できません。

4.社会と連携する難しさ：教育だからと、あらゆる負担を社会は許容してくれるわけではありません。失敗についても同様です。主体性を引き出すPBLではあるものの、社会と連携する場合には教員の誘導も必要になります。学生の主体性と教員による誘導という、この相反する要素をどうバランスさせるのか？実に難しい問題です。

参考文献

・中井俊樹編著
『シリーズ大学の教授法3　アクティブラーニング』
玉川大学出版部、2015年

・中島英博編著
『シリーズ大学の教授法1　授業設計』
玉川大学出版部、2016年

・溝上慎一監修、成田秀夫
『アクティブラーニング・シリーズ6　アクティブラーニングをどう始めるか』
東信堂、2016年

【鹿児島大学FD委員会FDガイドWG】

平井　一臣（法文学部委員）　甲斐　敬美（工学部・理工学研究科委員）
田川　まさみ（医歯学総合研究科委員）　米田　憲市（司法政策研究科委員）